

4段階で行われる IFRS導入プロジェクト 実施の手順

この章のポイント

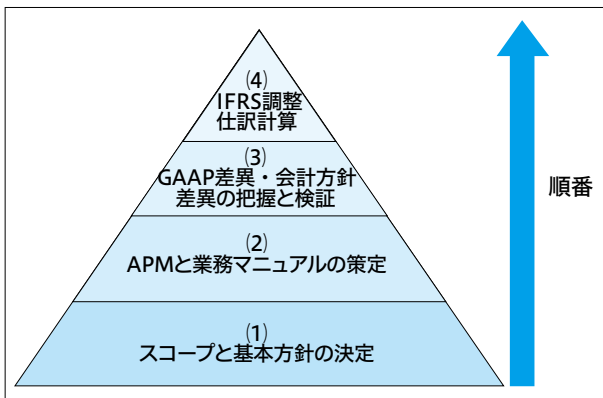
- IFRSの導入構成は、(1)スコープと基本方針の決定→(2)アカウンティングポリシー（APM）と業務マニュアルの策定→(3)GAAP差異・会計方針差異の把握と検証→(4)認識された差異についてIFRS調整仕訳の計算、の順番となる。
- 導入プロジェクトは必ずしもこの順番に行われるものではないが、最終的にはこの構成となる。

IFRS導入の構成

まずは、業務やシステムの影響をみる前にIFRS導入の構成概要を説明していく。

IFRS導入の構成は、まず(1)スコープと基本方針の決定からスター

(図表3) IFRS導入の構成



トする。その後、これをベースに会社の指針である(2)アカウンティングポリシー（APM）と業務マニュアルの策定が行われ、会社のIFRSの方針を実施レベルまで定めていく。会社の方針が定まった後に、現行の会計業務との差異を洗い出すための(3)GAAP差異・会計方針差異

の把握と検証が行われ、(2)で定めたIFRS指針と実際に採用している日本基準の会計処理との差異を調査する。その後、(4)認識された差異についてIFRS調整仕訳を計算する(図表3)。

なお、IFRS導入のプロジェクトは必ずしも前記の順番に行われるものではないが、影響度を調査し、継続的に反復しながら(1)～(4)の構成を作り上げていく形になる。各(1)～(4)のプロセスの詳細は次のとおりである。

(1) スコープと基本方針の決定

IFRSの最初のステップであり、グループ会社のうち、どの範囲までIFRSを導入していくか、またどの程度までIFRSを適用していくか、導入の基本方針を決定するプロセスである。

IFRS導入は理論上、すべての

グループ会社に、すべての会計処理にわたってIFRSが適用されるべきであるが、実務においては、小規模な会社も含めてすべてのグループ会社にIFRSを適用することは難しい。また、金額的や質的に影響度の小さい科目にまですべて厳密にIFRSを適用していくことも困難である。

このため、(1)のスコープと基本方針の決定の段階において、金額や質的に影響度の小さいグループ会社をIFRSの適用対象から除外し(範囲を限定)、かつIFRS適用対象に含まれるグループ会社においても、重要性の小さい科目を除外することによって、IFRS適用の効率化を図っていくことが多い。このような方針の決定がまとめられるプロセスである。

(2) アカウンティングポリシー（APM）、業務マニュアルの策定

グループ会社のIFRSの適用範囲が定まった段階で、次はアカウンティングポリシー（APM）と業務マニュアルを策定する。APMとはグループ会社で共有する会計方針を定めた文書であり、APMの説明や